

## 書 評

櫻田智恵、『タイ王国を支えた人々—  
プーミポン国王の行幸と映画を巡る奮闘  
記』（ブックレット《アジアを学ぼう》  
45）風響社、2017年、66p.

藤田 渡\*

平成の御世が終わろうとしている。ひとつの区切りとして、新しい時代に漠然とした希望、あるいは、不安を抱く人も多いのではないか。天皇は政治に関与しない「象徴」とする日本ですら、ひとつの国の社会全体がひとりの人間の生物学的な状態に左右される。君主制と国民国家の奇妙な共生である。タイでは、一足先に代替わりを果たした。先代のプーミポン国王の政治的影響力は絶大だった。崩御の瞬間に泣き崩れたタイ人の姿は印象的だった。本書は、そうしたプーミポン国王の権威が創り出される最初の段階、今風にいえばスタートアップを描いたものである。

具体的には、プーミポン国王の地方行幸が始まり、国王に関する映画が製作・上映された時代に、現場の担当者たちが苦勞しながらそれを実現していった舞台裏を、行幸の公的な記録や関係者の回顧録などから具体的なエピソードを丹念に拾い描く。ブックレットシリーズの1冊として、一般の読者にわかりやすく書くことや60ページ程度という紙幅の限りのなかで、学術的にも読み応えのある内容となっている。

まず、「はじめに」と、1章「プーミポン国王とは」で、タイや王室に関する基礎知識と、1950年代から60年代初めという本書で取り扱う時代の位置づけを確認する。反王制的だった人民党政権から、王室の権威を政治的に利用するサリット政権に移した転換の時代に、国王は、戦略的に自らの活動の余地と政治的プレゼンスの拡大を図ってきた。それが、その後の「開発の王」としての絶大な威信の礎となったことを強調する。

続く2章「美しき奉迎風景—その誕生」、第3章「美しき奉迎風景—その展開」では、初めての行幸が行なわれた経緯を紹介する。ビルマからの招待を、国内の各地域の訪問もできていないのに外国には行けない、という理由で断るなど、国王が行幸をかねてから望んでいたこと（pp. 13-14）、それが端緒となり行幸が計画され、中部、東北部、北部、という順で実行されたこと（pp. 15-31）などが紹介される。さまざまなドタバタがフィードバックされ、様式化・マニュアル化が進んでいった（pp. 31-33）。いまや「伝統」と思えるほどに様式化された国王の奉迎に関する所作は、実は、この時期の試行錯誤のなかで創られてきたものだったのだ。

第4章「美しい奉迎風景の美しくない舞台裏」では、本書の真骨頂(?)ともいえる、舞台裏で大変な苦勞をした人たちのエピソードがふんだんに紹介される。2日間、全く休みなく、水浴びもできずに働き通した警察官（pp. 36-37）や、心労で亡くなった県知事（p. 40）などが特に印象的だ。実は、タイでも、こういう少数の有能な人材が

\* 大阪府立大学人間社会システム科学研究科

ワーカホリックに働き、国家や社会を支えているのだろうか？それとも、国王の行幸という前代未聞の事態は、普段はそこまで勤勉でないタイの公務員を極限まで追い込んだのだろうか？興味は尽きない。

第5章「陛下の映画がやってくる」では、行幸だけではカバーしきれない全国津々浦々の国民に国王の存在を印象づけるために、映画が製作・上映された経緯を紹介する。ケーオクワンという、国王に見いだされ、専属のカメラマンとなり、後に、国王の宣伝部長といってもよい役割を担った人物の回想が柱となっている。国王がすべてを教えてくれた(p. 44)。国王の指導に忠実に従いお仕えすることを喜びとした(pp. 47-49)。こういう、愛すべき愚直さをもったケーオクワンの姿が、回想録からの引用を交え浮き彫りにされている。

プーミボン国王は自らの戦略を100%実現するため、こうした人々を文字どおり、手足として用いた。国王崩御の瞬間の我を忘れたかのようなタイの人々の姿は、その戦略が恐ろしいほどの成功を収めた証だろう。

「おわりに」では、プーミボン国王を「国王」にしたのは、こういう側近や役人たちだ(p. 57)、と再び強調し、さて、跡を継いだ新国王が、そういう忠良を得られるだろうか？—これが最初の課題だろう(p. 58)、と締めくくる。

実は、2018年7月の日本タイ学会研究大会で、本書の書評セッションが設けられた(私が評者を務めた)。著者の櫻田さんは、当日、豪雨災害の影響で来場できなかったが、

事前に評者がお送りした書評に対する著者からの応答を寄せてくださった。フロアからも、含蓄のあるコメントが寄せられた。以下、それらも含めて、本書の意義を考えてみたい。

まず、評者は、本書が描く草創期の行幸や映画制作の様子は、次の2点について考えるヒントになるのではないかと考えた。それは、1) 近代国家建設の文脈でこの時代をどうみるのか、2) 地方の人々の王権観、である。

1) 近代国家建設とこの時代：本書で描かれた行幸の顛末、特に、地方の人々や役人の動きからは、近代国家建設途上の「夜明け前」という印象を評者は受けた。興奮した群衆が国王の車列に群がる(p. 19)、道端の花、着用する腰布の切れ端、隣人からのお裾分けを献上する(p. 28)など、人々の行動は現代では考えられない素朴なものだった。役所では、道路などインフラ整備の予算が不足し知事がポケットマネーで賄い、ガソリン代が足りず役人が個人負担をしたという(p. 35)。近代的な法や組織による統治ではなく、個人の資質・資産に依存した「人治」の色合いが強く残っていたといえよう。水谷[2005]は、この時代の地方の警察について、法や組織・職責ではなく個人の資質に依存した治安維持が行なわれていたことを「近代警察の蹉跎」と呼んだが、本書が描く地方行政の様子は、それに通じるものがある。

著者からの応答のなかでは、こうした個人負担は、現代のタイでもあるとの補足があった。学会のセッションでは、フロアから、実は、日本でも天皇の行幸では地元の首長や民

間がポケットマネーを使っている。だから「タイは前近代的だ」というのは間違いだ、という指摘があった。君主の象徴権力を考えるうえで興味深い話である。ただし、インフラ整備の予算を（タイでは）政治家ではない官僚の知事が個人的に負担するなど、日本では無理だろう。近代的官僚制の透徹という点で、やはり日本とは相当な程度の違いを感じざるをえない。

また、評者は、この時代以降、行幸や映画による人々の国王の体験は、「想像の共同体」[アンダーソン 2007] の手がかりとして機能した可能性を指摘したが、著者からは、同様の視座での研究が、すでに日本の行幸については行なわれてきているのにタイについてはないことが不思議だった、という応答があった。本書で、タイについてもそうした視座を切り開くことができたことは評価されるべきだろう。

2) 地方の人々の王権観：一般に、プーミポン国王が人々から篤く敬われるのは、国民を支援してきたからだと思われる。少なくとも評者がタイで接してきた人たちはみなそう言っていた。しかし、実は、それも長年の間に構築されてきたものだった。初期の行幸では、奉迎する人々による国王への直訴は禁止された (p. 25) ように、民衆に実利的な恩恵を与えることは企図されていなかった。それにもかかわらず、人々は熱狂的に出迎えた。1950年代の人類学者の記述によれば、農民の家庭でアメリカのアイゼンハワー大統領の写真が飾られていた (p. 29) という。本書の舞台となった1950年代から1960

年代初めには、タンバイア [Tambiah 1976] がいうような仏教の護持者としての国王の神聖な力への畏敬が基礎にあり、また、「マンダラ国家」[Wolters 1999] のような多元的な力の配置が、地方の政治空間に相当程度、残存していたのだろう。開発、反共、といったなかで、国王の象徴的な重みは次第に並列する他のアイコンを圧倒し、一元的に塗りつぶしていったのではないだろうか。著者の応答では、サリットの死後、開発独裁により民衆を助ける「ポー・クン」（父親としての支配者）という意味）の側面を国王が吸収し、「完全な」国王になったのではないかと考えているということだった。

このように、本書は現代タイ政治の扇の要を描き、タイ政治研究にさまざまなインプリケーションを与えるものである。もちろん、ブックレットの制約から書き切れなかったこと、学会のセッションでフロアからのコメントで指摘された、ケーオクワン分析が、自身の回顧録のみに依拠しているという偏りなど、課題はある。そのうえで、これも、学会のセッションでフロアからのコメントだが、現にその国の人々にとって複雑な思いがある国王や王制について、表も裏もあるディスコースのバランスをとって語るのは難しい。本書は、そういう難しいテーマに取り組み、各国の王制研究に広がる可能性を切り開いた。今後も、著者には、国民国家において国王を敬う人々の心のひだに迫る研究を期待したい。

## 引用文献

Tambiah, S. J. 1976. *World Conqueror and World*

*Renounce: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background.*  
Cambridge: Cambridge University Press.

Wolters, O. W. 1999. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Ithaca: Cornell University. (Revised Edition.)

アンダーソン, ベネディクト. 2007. 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳, 書籍工房早山.

水谷康弘. 2005. 「タイ近代国家の蹉跌—人民党政権による警察改革の試みをめぐって」『東南アジア研究』43(2): 191-209.

堀江未央. 『娘たちのいない村—ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会, 2018年, 354 p.

綾部真雄\*

本書は、中国雲南省ラフ女性の遠隔地への婚出をめぐる良質なエスノグラフィである。地に足のついた、そして良心的な調査を実施してきたことが文章の端々からうかがえる。見てきたもの、聞いてきたことを文字に起こす前に、一度立ち止まって、違う角度から光をあて直す作業にも手間を惜しんでいない。先行研究における自論の布置の仕方にも工夫がある。通常、女性のマイグレーションをめぐる議論は、移住先での女性の生き方に焦点を当てることが多い。それに対して筆者は、あえて「送り出し側」、すなわち女性たちの出身村落に身を置き、そこで生じている「若い女性の不在」が、人々の意識と語りにもたらすかを緻密に描き出すことを試みてい

る。新鮮な手法である。また、遠隔地に嫁いだ女性たちのもとを訪れての聞き取りにも一定期間従事しており、結果として本書にマルチサイテッド・エスノグラフィとしての側面をもたせてもいる。

近年の人類学は、一次資料を後景化させ、思弁的な議論により比重を置くようになった感がある。「フィールド」とされてきたものの端っこが世界に溶けこみ、境界がみえにくくなるなかでの必然的な変化ではあるが、依拠しうるスタンダードの不在に、そこはかかない不安を抱えている人類学者も少なくない。そうしたなか本書は、ふんだんな一次資料を用いながらも、平板なファクトの羅列には終始せず、そこに巧みに最新の学術的課題や視点を織り込む姿勢をみせている。後述するように、理論面で若干の課題を残すようには見受けられるものの、今日的なエスノグラフィの書き方のひとつの範がここにあるといつてよい。

ここでいったん、本書の内容を概観する。

本書が対象とするのは、中国西南部に位置する雲南省の少数民族であるラフの村落における「若い女性の不在」と、その事実をめぐる村民らの語りである。現在、ラフの若い女性の多くは山東省、浙江省、江蘇省といった遠隔地に婚出しており、山間部の村落では非常にいびつな人口構成が生じている。通常のエスノグラフィであれば、婚出先の女性に焦点を当て、彼女たちの行動原理や価値の変化を追うところであるが、著者はあえて女性らの出身村でフィールドワークを実施し、空洞化した村を生きる人々の言葉の端々から、実

\* 首都大学東京人文科学研究科

際にはそこにはいない女性たちの輪郭を描き出すという手法をとる。

序論的な位置づけの「若い女性はどこ？」では、まず著者のスタンスが明確に示される。「女性を被害者と見なして婚姻移動の問題を指摘し、女性の脆弱性を改善するための提言を行う立場には立たない。かといって、女性の移動を女性の主体性発揮の契機である、と積極的に評価もしない」(p. 5)。すなわち、近年の公共人類学にみられるような学問成果の応用や還元動きとも距離を置き、フェミニスト人類学が唱道する女性の主体性の再評価の流れにも与せず、眼前で生起するさまざまな事柄について「ローカルな人々の眼差しから眺めてみることに徹する姿勢をまず打ち出している。こうした中庸を行くスタンスが、本書を貫く通奏低音ともなっている。

第1章(女性が流出する社会)は、事例の提示にさきがけ、「女性の流出」という現象にまつわる先行研究を俯瞰すると同時に、そこに「エスノ・エージェンシー」概念を導入することの論理的必然性を説くという構成をとっている。いわゆる「メールオーダーブライド」として中国からアメリカに嫁いだ女性には、沿岸部を中心とした大都市出身者が多かったのに対し、その後背地にある農村の女性たちは、そうした都市部へ「打工妹(出嫁ぎ娘)」として働きに出る。ラフ女性による遠隔地婚出は、このような後背地の農村におけるヨメ不足を補う側面をもつという。ラフ語で「ヘパとポイする」(「漢族と逃げる」の意)と表されることもあるこの事象をめぐ

り、著者は大別して2つの新機軸をここに持ち込もうとしている。ひとつは、先にも触れたように、女性を送り出す側の社会に関する視座の不足を埋めるという試みである。いまひとつは、女性のあり方をめぐって頻用される行為主体性/エージェンシーが、「たんに行為を主導する能動的な存在として描かれがちである点」をめぐり批判的考察である。女性たちのエージェンシーを、婚出する個人々の能動性を体現したものではなく、送り出し側と婚出する女性たちとの「不断の相互行為の積み重ね」のなかで「揺れ動く」より関係論的なもの(=エスノ・エージェンシー)として捉え直す姿勢といってもよい。なお、エスノ・エージェンシーにおける「エスノ」とは「エスニック」をパラフレーズしたのではなく、エスノメソドロジーにおけるそれと同様の「人々の」といった意味をもつ。

第2章(ラフ村落の空間秩序と婚姻慣行)は、雲南省のラフに関する民族誌的諸事実とその現代的变化をコンパクトに整理したものであり、ここでは詳細は割愛する。ただ、本書全体に関わる議論との関連でいえば、親族関係と結婚について述べている第3節が重要な位置づけにある。なかでも「村や家の外で形作られる未婚男女の関係性を村内に持ち込むのが結婚=『夫を求める/妻を求める』という契機である」(p. 103)という説明は興味深い。ラフ社会では未婚の男女が性関係をもつことが相対的に多いようであるが、一方で、そうした規範の逸脱を正す契機としての儀礼と儀礼によって取り結ばれた関係がも

たらず縛りは相応に重く、離婚は困難であるという。遠隔地婚出は、そこから来るストレスの延長線上にあるという現地での「語り」すらあるという。

第3章（遠隔地婚出の登場と変遷）では、男女別の省外分布状況など、ラフの人口動態の変化が具体的な統計的データを伴って紹介されている。統計をみる限りにおいては、ラフ女性の分布が漢族の農村が多い山東省や河南省などに集中していることが一目瞭然である。後半部では、ラフ女性の遠隔地婚出がどのような仲介者を通じて実現し、また婚出したラフ女性たち自身がどのようなネットワークを構築しているかが示される。女性たちによる婚出先での暮らしに関する（多くの場合）肯定的な語りも、さらなる婚出の呼び水となっていることもうかがえる。

第4章（遠隔地婚出をめぐる村人たちの語り）では、ラフ女性の遠隔地婚出をめぐる13の事例（語り）が時系列で提示される。著者のフィールドワークを追体験し、事例の臨場感を“楽しむ”という意味では、本章が本書全体のハイライトであるともいえる。本人不在のまま、村人たちの語りのみによっての婚出女性たちの人物像が次第に輪郭を取り始めるところに、著者のナラティブを再構成する技量を感じる。「不可解な移動を理解可能にするための様々なストーリーが試みられるが、それらの解釈は常にひとつの像を結ぶわけではなく、多声的に投げ出されたままのように見える」（p. 192）という言葉からもうかがえるように、著者はこれらの語りを強

引に一般化することはしない。人々の行動は、「誰かの主体的選択によってのみ起こることはあり得ず、様々な状況や他者との関りのなかで生起するもの」（p. 192）だからである。著者はこのことに鑑み、ストラザーンを引きつつ、ラフ女性たちの「人格（パーソンフッド）」を社会的な環境から切り離された独立性をもったものとして扱うことの限界についても一定の紙幅を割いて論じている。

第5章（逡巡するラフ女性たち）では、一転、遠隔地婚出を行なった女性たちに関する7つの事例が紹介される。漢族男性と結婚したこれらの女性たちは、婚出先で常に幸せな生活を送っているとは限らず、さまざまな事件に遭遇し、さまざまな感情を内に秘める。特に故郷への里帰りは、一部の女性にとって、順風満帆とはいえないこともある婚出先での生活を相対化し、自身のアイデンティティを再確認する契機ともなる。「逡巡」とは、一度は故郷と距離を置いた女性たちが、虚飾や虚勢を捨て去って原点に回帰しようとする際に生じる感情であるようにみえる。

第6章（女性の属する家はどこか）は、現代のラフ女性にとっての「家」への帰属が、儀礼的帰属と法的・制度的帰属との間で揺れるハイブリッド性をもつことを描き出した挑戦的な章である。ラフの招魂儀礼において「身体の魂」を呼び戻すためには、いったんそれを「炉の魂」が属す屋内の炉に招き入れ、そこから本人の身体に結び付け直すプロセスが必要となる。ある特定の人物の「身体の魂」は、その人物が帰属する家の「炉」を通じてしか呼び戻せない。したがって、婚出

した女性の招魂は、理論上生家では行なえないのである。しかし、本章の事例にみるように、実際には婚出後も母親が娘の魂を生家に呼び戻す儀礼を実施することがあり、理論上の整合性よりも親子のつながりが重視されることも少なくない。一方、女性の法的・制度的な帰属や立場は、結婚後に夫側の戸籍に入るか従来の戸籍を残すか、結婚証をどの段階で作成するか等によって大きく変わってくる。こうした状況を受け、著者は、近年のラブ社会におけるオリ（秩序）は、儀礼的帰属の原則と法的・制度的な帰属の原則とが不可分に混在したかたちで成立しているという見立てを示す。そして、それらの配置に明確な規則が存在しない以上、女性の帰属性（所在）は常に交渉の余地を残したものとなるという。

第7章（結論 移動する女性の所在と主体）は、ここまでの議論を1) エスノ・エージェンシー論、2) その土台としての人格観念、3) 人格観念と家との結び付き、および、そこに新たに組み込まれつつある行政書類の存在、の3つの観点から振り返り直すかたちをとっている。エスノ・エージェンシーを「行為を解釈する視点をその社会の人々に据え、人のあり方や人格観念との関わりから人の相互交渉を捉える手法」（p. 316）として簡潔に位置づけ直すといった工夫はみられるものの、基本的には既出の議論の厚みを加えた再整理が主眼となった章であり、結論まで取っておいた「隠し玉」は特に無いように見受けられる。

以下、評者なりに本書を総括してみたい。

まず、冒頭でも述べたように、本書が豊富な一次資料と新たな視点をもった良書であることは論を俟たない。特に、女性たちを「送り出す側」の社会にあえて焦点を当て既存の議論を補完しようとする姿勢、女性の主体性と能動性が互換的に捉えられがちな風潮への違和感を議論の出発点にしている点、などについては強く共感する。今後本書が、広義のマイグレーションや女性の婚姻移動、なかでも、中国雲南省における同様の事象の研究を志す人々にとっての必携書になりうる可能性も十分であろう。一方で、全体を通読した後にある種の消化不良感が残ったのも事実である。2つの点を指摘しておきたい。

ひとつは、本書の魅力的な諸事例を整理するうえで、「エスノ・エージェンシー」論という理論的枠組み、あるいは（著者がいうところの）手法は本当に必要であったかという根本的な点である。同論は、従来の視点の相対化を一定程度促すものではあっても、新たな議論の提出といえる次元には達していないのではないかと、論理の破綻こそないものの、それは「エスノ・エージェンシー」が非常に間口の広い概念として設定されているからであり、任意の女性のエージェンシーが在地の人間関係や社会的文脈に依存するものであるというのは人類学的に既知のことではなかったか。著者も引いているストラザーンのパーソンフッド（人格）やディヴィジュアル（分人）の考え方を超える、もしくは補完しうるだけの視点はどの程度あるのか。こうした疑問が頭をよぎる。

相応に厚みのある事例や一次資料が手元に

あるものの、整理の方向性が定まっていないとき、複数のランダムな既発表論文を一本化して理論的文脈を与え直すときなどに、当初から想定していたわけではない視点や枠組みを事後的に嵌め込むことは少なくない。そして、一貫性や整合性が損なわれていない限りにおいて、そのこと自体が批判される必要もない。しかしながら、そうした“手術”の痕を完全には隠しきれず、作為が僅かにでも透けてみえるとき、読者はそこに引っ掛かりを感じる。本書がそのようなケースにあたるのかどうかは分からない。ただ、その感触を完全には払拭できなかった。

2つ目は、本書の中核をなす視点が、ラフという民族を通じて示されることの必然性をめぐるものである。すなわち、本書で取り上げている遠隔地婚出という現象が、どの程度までラフに特有なものであるのか、あるいは、雲南省および隣接諸省の少数民族のなかでどの程度まで一般化できるものであるかという点についてである。本書ではこの点にほとんど触れていないため、読み進めるうちに、次第に霞みのようなものが思考を遮るようになっていった。少なくとも評者は、これほど多くの少数民族女性が後背地の漢族農村に婚出しているケースを本書以外で目にしたことがない。経済格差に基づく非対称的な婚姻関係を、時にローカルに時にグローバルに取り結ぶことがあるのはどの民族にも共通することであろう。だが、これほど明白で連鎖的な人口移動が起きている背景には、ラフの女性たちが置かれた状況と後背地の漢族農村との間に、単なる偶然を超えたなんらかの親

和性（のようなもの）が存在していると考えるのが妥当であるようにも思える。評者は、雲南省で本格的なフィールドワークを実施したことこそないが、少なくとも、過去に数回訪れたことのある雲南省のリス村落において同様の現象が起こっているという話を耳にすることはついぞなかった。

遠隔地婚出をラフ社会ならではの特質として議論することの困難は承知している。それは、プッシュ要因とプル要因の相関をある程度強引に同定すること、本質主義の誹りを受けられる可能性を残しつつ「ラフラシさ」を抽出すること抜きには、おそらく成立しえないからである。だが、本書もまたラフ社会をいささか脱文脈的に浮き上がらせることにより、結果的に「ラフラシさ」の再生産に携わっているともいえなくもない。であれば、むしろそのことを逆手に取り、「ラフラシさ」をより広い文脈に位置づけ直す試みがあってもよかったように思える。確かに本書は、漢族社会と国家行政を大きなキャンパスに据えたエスノグラフィになってはいるが、他方、ラフの人々が生きる直近の地政学的・生態学的文脈としての雲南省やゾミア（およびそこに住むさまざまな民族）が後景化しがちである部分は否めない。たとえば、遠隔地婚出をめぐる隣接諸民族との相対的な差異を多少なりとも描き込むことで、分析にさらなる奥行きをもたせることができたのではないだろうか。単純な比較はできないものの、民族誌的なデータの蓄積が最も進んでいるタイのラフに関する研究を、もう少し有効に引き合いに出すこともできたかもしれない。



こうして後出しじゃんけんで議論の陥穽を探してはいるが、これだけの書を世に問うた著者のエスノグラファーとしての手腕は掛け値なしに賞賛に値する。一同業者として、ここに投下したであろう時間と労力がいかに大きなものであったかは容易に想像がつく。人類学者が著すエスノグラフィやモノグラフは、実に高い頁単価と単独性に裏打ちされたものだとつくづく感じる。こんなことを考えていると、ついつい批判の矛先も鈍る。

高倉浩樹編、『寒冷アジアの文化生態史』  
(シリーズ 東北アジアの社会と環境)  
古今書院, 2018年, 130 p.

田中利和\*

アフリカを起源とする人類は寒冷アジアに進出し、どのように生きぬいてきたのであろうか。この寒冷地域には、ミクロな観点に立つと、他地域における従来の生業の研究成果だけでは十分に理解できない社会が存在する。たとえば、牧畜と漁撈が同時におこなわれることや、狩猟採集民が定住化し階層社会をつくる点である。本書は、寒冷という生態環境を背景とした北アジアの狩猟採集民や牧畜民の歴史を、環境と文化の相互作用として読み解き、個々の社会組織にみられる環境適応の柔軟性と脆弱性を明らかにするものである。

本書は5人の執筆者による5章の構成であり、考古学および民族誌的観察に依拠しな

がら、局所的な自然環境のなかで展開した個別の生業の複合に着目し、これを適応ないし進化という観点から分析したものである。各章は個別にも読めるし、全体の流れに沿うのもよい。なお、これらの論考は2015年12月5日6日に仙台でおこなわれた東北大学東北アジア研究センター20周年記念シンポジウム「東北アジア—地域研究の新たなパラダイム」のセッション「東北アジアの人類誌と環境適応」がもとになっている。内容をみていこう。

第1章「北東ユーラシアにおける人類の最寒冷期への適応」は先史考古学を専門とする鹿又喜隆によって執筆されている。寒冷北アジアの環境と技術の関係を旧石器時代の人類史の総説的な内容を含めながら、シベリアが起源と推測される石器の代表例である「細石刃(さいせきじん)」に焦点をあてて議論をしている。細石刃は、骨角製の槍先や銚先の側縁に彫られた溝に並べて嵌め込まれた道具である。最寒冷期に細石刃を有した集団が活発な活動を開始したことで、中国北部や韓半島、北海道まで、細石刃石器群は急速に拡散していった。これはツンドラステップとそこで生息する動物群の南下によるものと考えられ、この広域拡散は環境変動にともなう人類の長距離移動の証拠としてみることができると、日本列島はじめ北東ユーラシア沿岸部では細石刃石器群が広域にわたり消滅するが、対照的に、カムチャッカやアラスカの遺跡の調査からはそれらが存続したことがわかっていく。細石刃技術は人類の寒冷地適応

\* 東北大学東北アジア研究センター

の所産であり、その分布はその適応可能技術が温暖化によって北に移動した結果でもあるといえる。環境と人類の技術文化の相互関係を広域的に、そして長期の時間軸をとって実証的に検討していく研究の重要性がうかがえる。

第2章「アイヌ・エコシステムの舞台裏—民族誌に描かれたアイヌ社会像の再考」は人類学・歴史生態学を専門とする大西秀之によって執筆されている。東北アジアを代表する狩猟・漁撈・採集を主要な生業基盤としていたアイヌの民族誌と近年の歴史・考古学などの既存研究をもちいて、アイヌ社会の歴史的変遷とその舞台裏について論理的な考察をおこなっている。20世紀初頭までのアイヌ社会については、狩猟採集を基盤にしながらも、近隣の集団や国家と交易を積極的におこなうなかで比較的複雑な社会組織を形成し階層化を遂げるなど、他地域の狩猟採集社会とは異なる特徴が報告されてきた。著者はそのような生存戦略や社会形態は必ずしも自律的なものではなく、日中露などの周辺の国家による植民地主義の影響をうけて形成されてきたものだという。北海道アイヌと幕藩体制の関係についての分析を通じて導かれるアイヌ社会の特質とは、交易によって階層性が発生し、ややもすれば「首長制」にまで発展しうるような可能性を有していた反面で、最終的には外部社会に従属する側面をももっていたように、発展と従属の二極の振り子を持ち合わせたものであった。ここから著者は、アイヌ社会を歴史的な政治環境と自然環境へ適応する集団ととらえ、汎東アジア世界に広がる

資本主義の分業に組み込まれた「熱い社会」の一端であったことを論じている。歴史資料と民族誌の両輪で分析をすすめる点は、多くの示唆がある。

第3章「永久凍土と人類文化の相互作用—東シベリア森林地帯における動的自然・マイクロ環境・進化をめぐる考察」は社会人類学、北極研究を専門とする高倉浩樹によって執筆されている。環境はつねに変化しつづける「動的自然」という見方をもって、自然環境の変化に応答する社会・文化という視座で分析することの重要性を指摘する。そのうえで、極寒のシベリア、サハの人びとの生業と歴史、自然環境の関係性を論理的に説明していく。10-13世紀頃に東シベリアに北上した牧畜民サハは、永久凍土の地表上の森林内に形成されるアラスとよばれる湖沼を、牧畜適応において根源的な条件である牧草地・採草地と認識し、生業適応をおこなった。あわせて沼湖では漁撈をおこない、アラスの外に広がる森林では狩猟するという生業適応と複合をあらたに形成し、人口の規模でも近隣集団を圧倒した。環境は生業選択の選択肢を限定するが、そのなかで何を選ぶかは歴史や文化に依拠するという「歴史可能主義」を援用することによって理解がすすむことを示している。環境史と人類史の交差の方法と論理の可能性を切りひらく論考であるといえる。

第4章「西シベリア森林地帯における淡水漁撈とトナカイ牧畜の環境利用」は、社会人類学、シベリア地域研究を専門とする大石侑香によって執筆されている。広大な森林と湿原を舞台に同時代を生きるハンティのトナ

カイ牧畜と漁撈の生業複合について、2011年から2012年にかけて計7ヵ月間ヌムト湖周辺でおこなったフィールドワークのデータをもとに民族誌的記述をおこなっている。生業暦をみてみると、冬季、氷点下2.3–20.9°Cに屠畜をおこなうことは、肉をそのまま冷凍保存することにも通じる。それは漁撈が困難で魚が不足する湖川の凍結期に食料を補う寒冷地特有の資源管理の方法とみることができる。最も興味深い点は、「トナカイが魚を食べる」という点である。人間が捕獲した魚をトナカイに与え、群れの管理に利用しているという。ひとつ目の目的は、人が魚をまいて、牧柵のなかなど目的の場所へトナカイ群を誘導するためである。2つ目の目的は、人が魚を優先的に特定のトナカイに手で与え、人に順化した先導するトナカイの個体をつくりだし、群管理に役立てるためである。魚とトナカイが結びついた特有の生業複合が同地域には存在しており、鍵となる魚資源を提供する自然環境利用の漁撈と牧畜の文化が調和していることが論じられている。

第5章「生態環境が育む北アジア牧畜の特徴—西アジア牧畜との対比から」は文化人類学、牧畜研究、乳文化研究を専門とする平田昌弘によって執筆されている。西アジアで紀元前8500年頃に家畜化し、現在同地域および北アジアでも飼養されているヒツジとヤギに着目しながら、地域間比較を通じて、冷涼な生態環境下の牧畜がいかにか形成されていったのかを考察したものである。搾乳と乳利用は少なくとも考古学的知見から、紀元前7千年紀にはおこなわれていたことが明らか

になっており、西アジアで一元的に起源周辺地域に伝わっていったと乳文化の研究から示唆されている。一方で北アジアの牧畜の特徴は冬に草地の飼料資源が乏しくなり、搾乳量が少なくなることに加えて、まとまった数の家畜を屠殺し、氷点下20°Cを下まわる環境のもと冷凍保存もできるため、肉の摂取量が冬では半分弱にもなることがあげられる。両地域の家畜管理技術の紹介をふまえたうえで、西アジアに特徴的な発酵乳系列群の南方乳文化圏が、北アジアに特徴的な、酸乳に加工する必然性から開放されたクリーム分離系列群の北方乳文化圏へと変遷した主要因は「冷涼性」であることを、自然科学的な説明も加えながら論じている。生態環境と牧畜文化の相互作用によって、それぞれの地域における乳文化の型を文理横断的に論じる貴重な視座を提供している。

各章を簡潔に紹介してきたが、本書は一貫して、寒冷アジアに暮らしてきた人びとと環境との関係をテーマに、各専門の方法論を駆使して理論的考察をおこなっており、これによりあらたな知見を提示している点が最大の魅力といえるだろう。本書は寒冷アジアに暮らす人びとに関心がある考古学、歴史学、人類学を研究する人が活用できるだけでなく、アジア・アフリカをはじめ他地域の人びとに関心をもって研究をする人にも勧めることができる。それは、環境と文化の相互作用という柔軟かつダイナミックな分析視点を備える本書が、特定の地域と人びとを理解するうえでの地域研究の調査方法について重要な問題提起をおこない、かつその方法に厚みをもた

せるものと思われるからである。本書には、個人による研究の可能性を広げることに加えて、他分野の研究者と、地域・人間理解を目指した共同研究を発展させるためのヒントが詰まっている。地域研究の枠組みと可能性を広げる本としておおいに価値があるといえる。

最後に、編者の寒冷アジア研究をめぐる各執筆者の魅力をバランスよく調和した本にしあげた「ブレンド力」に敬意を示したうえで、評者が味わって見たかった点をあげてみたい。各章間における執筆者や研究分野の相互作用が正あるいは負に働く可能性などが議論されている紙面があれば、さらに楽しめた

のではないかと考える。具体的には、本書のもととなった、シンポジウムの質疑応答や総合討論の記録、まとめなどである。もちろん、本書の構成と各章にその議論が反映されていることは想像できる。しかし、今後の地域研究のあり方や展開、課題を検討するうえでも、そのような討論の場の情報は貴重な材料となりうるし、このような試みの場における空気感に文章を通じてふれてみたかった。今後も寒冷地をめぐる北方アジアの研究から、学問分野と地域の越境・連携も含めた、知的可能性を開拓する研究の成果が発表されることを楽しみにしている。